巻 頭 言

次代を担う実践的・創造的技術者の育成

豊橋技術科学大学大学院
松 田　厚 範

Matsuda Atsunori

歴史あるニューガラスフォーラムの機関紙“NEW　GLASS”の巻頭言を執筆させて頂く機会を頂きましたことに感謝いたします。私は，ガラスメーカーで10年間勤務した後，大学へ教員として戻り，企業での経験も生かして機能性ガラス・非晶質材料の基礎と応用に関する研究と教育を行っております。また，現在ニューガラスフォーラムのガラス科学技術研究会で主査を担当させて頂いており，同会では，ガラス技術の新たな展開や，顕著な進展に関する話題を取り上げ，産学官が議論する場，あるいはニーズとシーズの出会いの場を提供できるよう努めております。

さて，円高，東日本大震災をはじめとする大規模な災害，ヨーロッパの金融不安などを背景に，半導体，家庭用電気機器，素材など各種方面で大変厳しい状況が続いております。変化の速さと激しさには，驚かされるばかりです。経営の合理化・選択化，製造拠点の海外展開，さらに人員の削減によってその危機をなんとか乗りきろうとする一方で，あらためて強い技術に裏打ちされた「ものづくり」の大切さが叫ばれております。それを支えるのは技術者であり，豊かな人間性と国際的視野を持ち，実践力と創造力を兼ね備えた技術者の育成が，これからますます重要であることはいうまでもありません。

今年 6 月に国家戦略会議において，文部科学省から「社会の期待に応える教育改革の推進」という指針が示されました。その中には，教育制度や入試の改革，国際競争力の強化など教育改革の 7 つのポイントが明示されましたが，そのうちの 6 項目は，大学に強く改革を求めるものとなっております。このことは，大学教育に対する期待の大きさと同時に，現在大学が行っている人材育成を，社会や国民が高くは評価していないことを反映したものと見ることができます。同じく策定された「大学改革実行プラン～社会変革のエンジンとなる大学づくり～」の内容を，特に人材育成と産学連携の観点で見ますと，産学協働によるグローバル人材・イノベーション人材の育成推進が非常に重要視されておりま

す。大学で先端技術の研究と工学教育の現場をあずかる私たち教員は，今改めて，日本社会が直面する課題と大学の果たすべき役割をよく考えて，企業や地域の皆さんと連携を持ちながら，学生一人一人の特性を伸ばし，鍛え，育てる必要があります。

明治の激動を行き，関東大震災からの復興を計画した後藤新平が遺した言葉に「金を残して死ぬ者は下，仕事を残して死ぬ者は中，人を残して死ぬ者は上」という名言があるそうです。もはやお金を残す術はなさそうなので，仕事である研究・教育に真摯に向き合って，次代を担う人材を育成することに一所懸命となって，生きた証を残したいものだと思っております。